

## 南インド少数民族地域の営農体系における植物資源利用の重要性と可能性

綱島 洋之 氏 (京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

インド、アーンドラ・プラデシュ州カマン県の少数民族コヤ族地域において、2004年9月から2005年5月、2005年12月から2006年4月にかけて現地調査を実施した。

調査地の一部地域では、10数年ほど前からトウガラシ換金栽培が流行り始め、現在では経済的に最も重要な位置を占めている。収量や販売価格が順当であれば収益性が高い反面、高収量を得るためには外部投入資材を多く必要とする。その高投入性の弊害が、借金苦や農薬被曝という形で表れてきた。この問題を解決するために、地域で入手可能な植物資源を、病虫害防除に活用することはできないだろうかと考えて、植物農薬として有効な植物の探索を開始した。今のところ、数種類の植物資源が主要害虫ハスモンヨトウの防除に有効であることが、室内実験により示唆されている。

調査地内の別地域では、トウガラシの換金栽培は行われておらず、モロコシと水稻を中心とした、従来の自給的色彩の強い低投入型農業が展開されている。現金収入を少ししかもたらさない低投入型農業が継続できているのは、地域の豊富な植物資源により一定の現金収入がもたらされているからである。

本発表では、以上の内容を詳説し、農業生態・社会経済の両側面から考察する。持続可能な農業技術を開発あるいは維持するための方途として、地域の植物資源を活用しようという発想が有効であるかどうかを、議論したいと考えている。